

位置移動の動詞“过”における 基本義と派生義について

高 橋 弥守彦

The Basic and Derivative Meanings of the Verb of Motion “Guo”

TAKAHASHI Yasuhiko

【キーワード】

ありさま移動の動詞 位置移動の動詞 趨向移動の動詞 空間名詞 連語

0. 内容提要

本文讨论“过+空间词”和“动词+过+空间词”里的位置性移动动词“过”和空间词的关系。从空间词的形状来说，位置性移动动词“过”可以跟线条性名词“河，马路，长安街”或范围性名词“公园，新华书店，天安门广场”或角度性名词“山，坡，山冈”等三类空间词搭配。笔者认为它们并不可以随意搭配，它们的搭配是有语法规则可寻的。

目次

1. はじめに
2. 単語の基本義と派生義
3. 位置移動の動詞“过”の基本義と派生義
4. おわりに

1. はじめに

筆者のいう位置移動の動詞“过”¹⁾は、『八』によれば動詞と趨向動詞とに分けられる²⁾。『八』では、動詞としての“过”を語彙的な意味の面から「(場所を) 通り過ぎる」や「時間が過ぎる、時間を過ごす」などの四類に分けて説明し、趨向動詞としての“过”を構造的な側面から「動詞+“过”[+名詞]」などの三類に分けて説明している。『八』の説は分かり易いので、これまで多くの中国語研究者や学習者によって使われてきているが、『八』でいう“过”の動詞と趨向動詞との分類にみられるように、“过”の分類基準が『八』のなかで統一されているわけではないので、問題がないわけではない。また、なぜ“过”の意味がこのように分かれるのかについても

『八』では触れていない。

朴鐘漢に認知言語学の立場から“过”の意味拡張について言及した論文がある³⁾。朴鐘漢はこれの中で“过”を『八』と同様、動詞と趨向動詞とに分け、認知言語学の理論により、“过”の意味拡張がなぜおきるのかについて述べている。これまでは、この方面の研究があまりすすんでいなかったため、この論文によって、啓発される場所は多々あるが、まだ不十分な点も若干あるように感じられる。

連語論でも多義語の面から単語の基本義と派生義とについて奥田靖雄、鈴木康之などが言及している⁴⁾。日本語の連語論では単語の形式面からの「くみあわせ」を連語と言い、連語としての一定の構造的なタイプによって一定の連語論的な意味が実現されている関係にある集合体を「むすびつき」と言う。連語をこのような単語と単語との形式面からの「くみあわせ」と意味的な関係付けの面からの「むすびつき」とに分けて、むすびつきのなかで単語に語彙的な意味変化が生じるとしている⁵⁾。また、筆者にも中国語の単語に多義語がなぜ生じるのかについて触れた文章がある⁶⁾。しかし、これは連語内部のむすびつきを分析したものであり、このなかで若干ふれているが、単語の基本義と派生義とについてもつばら論じているものではない。

筆者は本稿で連語論の立場から“过”の表す意味がなぜ幾つかに分かれているのかについて分析し、“过”の基本義と派生義とについて言及し、“过”の表す意味を体系化する。同時に日本語と中国語の単語の基本義と派生義とに関する理論にも言及し、中国語の“过”の基本義と派生義およびその体系を連語論の立場から明らかにする。

2. 単語の基本義と派生義

連語論のなかでは、連語を「くみあわせ」と「むすびつき」の二類に分けている。この「くみあわせ」と「むすびつき」とに分類する「むすびつき」のなかで、単語の意味変化が起きる。筆者は各連語を収集し、構造的なタイプに図表化する過程のなかで「くみあわせ」と「むすびつき」を次のように分けている。

連語論における「くみあわせ」:

連語論が対象とする連語は、ある一定の単語を核として（そのような単語をカザラレと言う）、それに一定の単語を付加する（そのような単語をカザリと言う）という集合体によって構成されている。この形式的な集合体を連語論では「くみあわせ」と言う。

連語論における「むすびつき」:

連語論が対象とするカザリ単語とカザラレ単語とのくみあわせは、連語の核となるカザラレ単語が、自分自身の意味するものごとをより具体化させるために、一定のカザリ単語を支配し、一定の構造的なタイプ（連語論的な構造）により、連語論的な意味を実現させて

いる。連語論ではこのような一定の連語論的な意味を実現させているカザリとカザラレとの関係を「むすびつき」と言う。

単語の多義語は奥田靖雄（1976）が指摘するように連語の「むすびつき」の中で起きる。連語論では多義語の面から単語の基本義と派生義とについて、むすびつきの違いを挙げている。奥田靖雄（1976）は「ひとたびできあがった構造的なむすびつきが、ぎゃくに構成要素である単語の語彙的な内容に働きかけて、その変更、修正、あるいは追加をもとめる」と論じ、さらに「その変化のし方はすべてがひとしいわけではなく、さまざまな段階、形態あるいは程度があるだろう」と述べている。そして次のように論を進めている。

むすぶ、まくのような動詞がすでに多義語であるとすれば、おなじような意味あい、ほす、わるはまだ多義語にはなっていない。とりつけの構造のなかでの、これらの動詞の語彙的な意味は、*facultative* といっていいたいだろう。これらの連語はかざられ動詞の *valence* によって作りだされたわけではない。構造的なタイプが構成要素の語彙的な意味に修正をもとめて、それにあたらしい *valence* をつけくわえているのである。しかし、いまここでたいせつなことは、単語の語彙的な意味の変化が連語の構造的なタイプのなかで発生し、進行するということである。そして、すでに変化をとげた語彙的な意味は、その構造的なタイプのなかに存在しつづけるということである。

一般に、多義語は、連語を作る単語の語彙的な意味に派生義が起こって生じるのであるが、そのばあい、おおくは、各むすびつきの構造的なタイプを媒介としている。

これとはべつに、高橋（2003c）では鈴木康之の指導のもとに各むすびつきを図表化し、典型的な例を挙げ、カザラレ動詞と場所を意味するカザリ名詞をそれぞれ二類に分けている。また、カザラレ動詞の第一の対象である客体は<もの><ひと><こと>の三類に分けている。たとえば「もようがえのむすびつき」と「とりつけのむすびつき」における次の図表と例を見ていただこう。

[表1] <もの>のもようがえのむすびつき

～を	～する
もの名詞	もようがえを意味する動詞

リボンをむすぶ。タオルをまく。さんまをやく。茶をあたためる。たまねぎをいためる。
ノートをまっくろによごす。手ぬぐいをあかく染める。棒をふたつに折る。石をこまかく砕く。／ささあめをたべる。酒をのむ。

[表2] とりつけのむすびつき

～を	～に	～する
もの名詞	場所を意味する名詞	とりつけを意味する動詞

リボンを髪にむすぶ。あたまにタオルを巻く。クリームを手にもる。／手紙をドアにはさむ。花瓶を机の上に置く。新聞をテーブルにひろげる。

この図表と例とは鈴木康之の指導のもとに、高橋（2003c）が奥田のいう「もようがえのむすびつき」と「とりつけのむすびつき」を図表化し典型的な例を挙げることによって、二つのむすびつきを分かりやすく整理したものである。また、高橋は各むすびつきを意味する動詞を鈴木康之の指導のもとに「各むすびつきを示す基本動詞」と「各むすびつきを示せる許容動詞」、および場所を意味する名詞を「場所を示す基本空間名詞」と「場所を示せる許容空間名詞」の二類に分けている。

[表1]の「もようがえのむすびつき」のなかの「リボンをむすぶ。タオルをまく」の「むすぶ、まく」は「むすぶ、まく」が本来もっている意味と「もようがえのむすびつき」のなかに用いられている「むすぶ、まく」と意味がかわらないので「もようがえを示す基本動詞」といえよう。しかし、「むすぶ、まく」が[表2]の「とりつけのむすびつき」のなかに用いられると、「むすびつける、まきつける」の意味として使われ本来の意味と異なってくるので、「とりつけを示せる許容動詞」といえよう。またたとえば、「とりつけのむすびつき」のなかに挙げる「テーブル」は一般的にはもの名詞としてもものを示しているが、「とりつけのむすびつき」のなかでは「場所を意味する名詞」として場所を示しているので、「場所を示せる許容空間名詞」といえる。これは「とりつけのむすびつき」のなかであれば、「テーブル」といっても「テーブルの上」といっても、どちらも場所を意味しているので、「テーブル」が「とりつけのむすびつき」のなかでは「場所を意味する名詞」となる名詞と言ってもよいであろう。この「テーブル」が場所を示せるのは「とりつけのむすびつき」のなかの場所を意味する名詞の位置に「テーブル」を用いることにより、「とりつけのむすびつき」を作る構造的なタイプが「テーブル」に場所性を加味させているからである。このように、「とりつけのむすびつき」の中では、「テーブル」がモノではなく、場所として扱われているので、「場所を示せる許容空間名詞」という。ここまでを筆者は多義語の問題として捉えている。

ここで単語の基本義と派生義との関係について考えてみよう。単語の基本義と派生義とについては、次のような例文によって示すことができるであろう。

(1) 彼らは学校から歩いて出て行った。

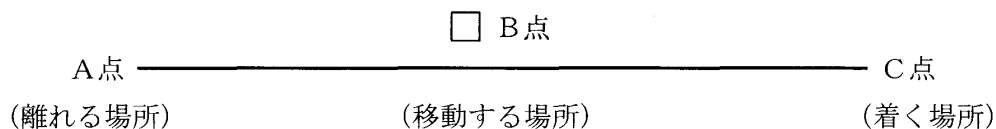
上記の例文中の「学校から歩いて出て行った」は連語であり、「学校から」は主体「彼らは」の離れる場所であり、「歩いて出て行った」は主体の空間的な移動を示しているので、「空間的な移りのむすびつき」である。

ところで、主体「彼らは」の空間的な移動を示す「歩いて出て行った」はありさま移動の動詞「歩いて」、位置移動の動詞「出て」、趨向移動の動詞「行った」の三類の移動を表す動詞から作られている。これら三類の移動を表す動詞は、いくつかのむすびつきのなかに用いられる。趨向移動の動詞「行く」によって、その言語現象を見てみよう。

- (2) 台所に行く。トイレに行く。(空間的な移りのむすびつき)
- (3) 学校へ行く。会社へ行く。(空間的な移りのむすびつき)
- (4) 公園まで行く。川原まで行く。(空間的な移りのむすびつき)
- (5) 池袋から行く。問屋から行く。(空間的な移りのむすびつき)
- (6) 学校から市役所に行く。池袋から新宿に行く。(空間的な移りのむすびつき)
- (7) 会社から都庁まで行く。池袋から東松山まで行く。(空間的な移りのむすびつき)
- (8) 甲州街道を行く。町なかを行く。(移動のむすびつき)
- (9) 人が縫うようにその脇を行く。(通過のむすびつき)
- (10) 新撰組を行く。(態度的な移動のむすびつき)
- (11) 八時に学校へ行く。(離れのむすびつき・到着のむすびつき)
- (12) 八時までに学校へ行く。(到着のむすびつき)

「行く」を用いる六つのむすびつき（「空間的な移りのむすびつき」「移動のむすびつき」「通過のむすびつき」「態度的な移動のむすびつき」「離れのむすびつき」「到着のむすびつき」）は、場所を意味する名詞との関係で、次のように整理できる。

[表3] 「行く」(話者の視点を表す移動) と場所を意味する名詞との関係



- i. 「行く」とA点は主体の移動により、「空間的な移りのむすびつき」を作る。(例5)
- ii. 「行く」と移動する場所は主体の移動により、「移動のむすびつき」を作る。(例8)
- iii. 「行く」とB点の脇は主体の移動により、「通過のむすびつき」を作る。(例9)
- iv. 「行く」とC点は主体の移動により、「空間的な移りのむすびつき」を作る。(例2, 3, 4)
- v. 「行く」とC点は主体の態度的な移動により、「態度的な移動のむすびつき」を作る。(例10)
- vi. 「行く」とA点からC点までは主体の移動により、「空間的な移りのむすびつき」を作る。(例6, 7)
- vii. 「行く」とC点に「ニ」格の時間名詞が加わると、主体の移動により、「離れのむすびつき・到着のむすびつき」を作る。(例11)

- viii. 「行く」とC点に「マデ+ニ」格の時間名詞が加わると、主体の移動により、「到着のむすびつき」を作る。(例12)

「行く」の基本義は「ある場所を離れて他の場所へ移る」である。基本義の内部に「離れる」「移動する」「到着する」の三側面が内在し、これらの側面が統一されて「行く」となっている。「行く」にはこの三側面が内在しているので、「行く」がどのような場所を意味する名詞とむすびつきかによって、各むすびつきにおける「行く」の意味に変化が起こり多義語となっていることが分かる。

これらのむすびつきに使われている「行く」を整理すると、「行く」は基本義と派生義とに分かれ、多義語が生じていることが分かる。単語の多義語は奥田が多義語で指摘するようにむすびつきの違いによって生じる。むすびつきの違いは同じ動詞であれば、格付き空間名詞の違いによって生じる。

「行く」は「ある場所を離れて他の場所へ移る」という意味が基本義である。「空間的な移りのむすびつき」(例2～7)のなかでは、「行く」は「ニ、へ、マデ、カラ」格の各範囲性名詞(例2～5)と「カラ格+ニ格、カラ格+マデ格」の各範囲性名詞(例6,7)と組み合わせたり、「ある場所を離れて他の場所へ移動する」の意味を示すので基本義として使われている。「移動のむすびつき」(例8)のなかでは、「行く」は「行く」が「ヲ」格の線条性名詞「甲州街道」と範囲性名詞とみなせる方位名詞連語「町なか」(例8)と組み合わせると、「移動する」の意味を示しているので、派生義である。「通過のむすびつき」(例9)のなかでは、「行く」は「ヲ」格の線条性名詞とみなせる部分場所的な名詞連語「その脇」とむすびつき、「通過する」の意味を示しているので、やはり派生義である。「態度的な移動のむすびつき」(例10)のなかでは、「行く」は「行く」が「ヲ」格の範囲性名詞とみなせる「新撰組」(例10の「新撰組」は「新撰組のゆかりの地」の意)と組み合わせると、「訪ねる」の意味を示しているので、派生義である。「離れのむすびつき」と「到着のむすびつき」の両方を示すむすびつき(例11)のなかでは、「行く」は「ニ」格の時間名詞と「へ/ニ」格の範囲性名詞とむすびつき、「到着する」と慣用的な意味で「(ある場所を)離れる」との二つの意味を示しているので、やはり派生義である。「行く」が「マデ+ニ」格の時間名詞と「へ/ニ」格の範囲性名詞と組み合わせると「到着のむすびつき」(例12)を作り、「到着する」の意味を示しているので、やはり派生義である。これらのむすびつきに用いられる「行く」は[表4]に示せるであろう。

[表4] 「行く」の基本義と派生義

- i. 空間的な移りのむすびつき (例2～7) : 基本義 (A点を離れてB点へ移る)
- ii. 離れのむすびつき (例11) : 派生義 (離れる)
- iii. 移動のむすびつき (例8) : 派生義 (移動する)

- iv. 通過のむすびつき (例9) : 派生義 (通過する)
- v. 態度的な移動のむすびつき (例10) : 派生義 (訪ねる)
- vi. 到着のむすびつき (例11, 12) : 派生義 (到着する)

上記の表から、主体が「行く」という運動によって、A点を離れてB点へ移ると「空間的な移りのむすびつき」(例2～7)が作れ、その中の「ある場所を離れる」にスポットを当てると「離れのむすびつき」(例11)が作れ、「移動する」にスポットをあてると「移動のむすびつき」(例8)が作れ、「移動する」という運動の過程で、ある場所を通り過ぎれば、「通過のむすびつき」(例9)が作れ、「他の場所に移る」にスポットをあてれば「態度的な移動のむすびつき」(例10)と「到着のむすびつき」(例11, 12)とが作れる。「行く」を用いて作るそれぞれのスポットを当てる場所は空間名詞であり、これらの格付き空間名詞は形状別に分類でき、どのような形状の格付き空間名詞と「行く」とがむすびつくかによって、それぞれのむすびつきが作れる。それゆえ、[表4]から各むすびつきのなかに用いられる「行く」の基本義と派生義からなる意味の体系は、異なる形状の格付き空間名詞とのむすびつきによって生じると言える。

連語論の観点から分析すると、日本語における上述のような各むすびつきのなかで、派生義が生じ多義語になるとみなしてよいであろう。次に連語論の観点によって中国語の“过”を用いて作る連語を分析してみよう。

3. 位置移動の動詞“过”の基本義と派生義

筆者は“过”を位置移動の動詞とみなしているが、『八』では“过”を動詞と趨向動詞としている。『八』で言う動詞“过”には四類の意味があり、趨向動詞“过”には三類の意味がある⁷⁾。

3.1. 「“过”(＋名詞)」の“过”

まず、『八』の「“过”(＋名詞)」における動詞“过”の用法から見てみよう。

- (13) 游行队伍正好从我家门前过。(『八』 p. 138)
デモ隊がちょうど家の前を通っていった。(同上)
- (14) 红军那时候爬雪山过草地多么艰苦啊！(『八』 p. 138)
紅軍はあのころ雪山を登り草原を越え、どんなに苦しかったことか。(同上)
- (15) 过了这条街就到了。(『八』 p. 138)
この通りをぬければすぐに着くよ。(同上)
この通りを渡るとすぐです。(筆者訳)／この通りを過ぎればすぐです。(筆者訳)
- (16) 再过半年, 这条水渠就完工了。(『八』 p. 138)
あと半年したら、この用水路は完成する。(同上)
- (17) 你回广州过春节吗？(『八』 p. 138)
広州に戻って旧正月を過ごすの？ (同上)

- (18) 过了明天, 这张参观券就作废了。(『八』 p. 139)
 明日を過ぎれば、この入場券はむだになってしまう。(同上)
- (19) 我已经年过半百。(『八』 p. 139)
 私はもう50の坂を越えた。(同上)
- (20) 这篇课文我又过了一遍。(『八』 p. 139)
 このテキストにもう一度目を通した。(同上)
- (21) 把今天的事在脑子里又过了一下。(『八』 p. 139)
 今日の事を頭の中で再び振り返ってみた。(同上)

[表5] 『八』による動詞“过”の意味分類⁸⁾

- ア. (場所を) 通り過ぎる: 例 (13) (14) (15)
 イ. 時間が過ぎる、時間を過ごす: 例 (16) (17)
 ウ. (ある範囲や限度を) 超過する: 例 (18) (19)
 エ. (ある処理を) 経過させる: 例 (20) (21)

『荒』の動詞“过”に関する意味分類⁹⁾も、『荒』に用いている術語と『八』とは若干異なるが、基本的には『八』と同様とみなしてよいであろう。

“过”と“过”の客体とで作る出来事は、“过”の客体が何かによって領域別の分類を作れる。“过”の客体は例 (13) (14) (15) が「場所」、例 (16) から (19) が「時間」、例 (20) (21) が「こと」である。ここで、領域別の分類と“过”との関係について調べてみよう。

“过”の原義は「過ぎる」¹⁰⁾である。“过”は次のような何類かの領域別の客体とむすびつき、客体となる領域の違いによって、[表5]にあるような、いろいろな意味を表すが、その基本義から逸脱することはない。

“过”が場所を示す空間名詞とむすびつくと、例 (14) (15) のように用いられる。例 (14) の出来事“过草地”が言えるのは、“草地”が範囲性の名詞だからであり、例 (15) の出来事“过了这条街”が言えるのは、“这条街”の“街”が線条性の名詞だからである。これらの連語が成立するのは“过”が範囲性の名詞と線条性の名詞とむすびつくことによる¹¹⁾。“过”がこれらの空間名詞とむすびつき、一定の構造的なタイプを作ると「通過する」の意味を示す。そして、これらの空間名詞“草地”や空間名詞連語“这条街”は主体の通り過ぎるところである。“过”を用いる例 (13) の出来事が“从我家门前过”としか言えなく、“过我家门前”と言えないのは、“我家门前”の“前”が線条性の名詞または範囲性の名詞ではなく方位名詞だからである。方位名詞“前”は“过”のとれる客体ではないので、「“过”+空間語」を作る連語として成立しないのである。

“过”が時間名詞とむすびつくと、例 (16) から (19) のように用いられる。“半年, 春节, 明天”はいずれも時間名詞であり、“半百”は数詞である。“半年”は時間の長さ、“春节, 明天”は時間

軸上に現れる時間名詞、“半百”はこれだけでは数詞であるが、“年过半百”のなかに用いられることにより、年齢をあらわす。年齢は一年が経過すると一歳が加算されるので、やはり時間を示せる名詞と言ってよいであろう。これらの時間名詞は時点“春节，明天”と時段“半年，半百”とに大別でき、どちらも“过”の対象として“过半年／春节／明天／半百”のように用いられる。“过”がこれらの時間名詞とむすびつくと、時間が「(時間が)過ぎる」「(時間を)過ごす」の意味を示す。そして、これらの時間名詞は時間が過ぎる時点“春节，明天”と時段“半年，半百”であり、主体が過ぎる時点と時段ではない¹²⁾。主体は時間軸上にいるだけであり、時間が時点と時段を過ぎるのである。

“过”がコト名詞とむすびつくと、例(20)(21)のように用いられる。“一遍，一下”は数量連語であるが、“过了一遍”“过了一下”が「コト」を表すので、この連語のなかに用いられることによって、コト名詞なみに扱われている、とみなされる。数量連語“一遍，一下”は対象“这篇课文，今天的事”に対して主体が対処する回数であり、具体的には“又过了一遍”“又过了一下”は「反復する」の意味になるであろう。

[表6]「“过”(＋名詞)」の“过”とむすびつく領域別の客体

- ア. 場所：例(13)(14)(15)
- イ. 時間：例(16)(17)(18)(19)
- ウ. コト：例(20)(21)

「“过”(＋名詞)」の“过”が領域別の名詞とむすびつくことによって、基本義「過ぎる」以外は派生義としての多義語となるが、派生義としての多義語となっても、「“过”(＋名詞)」の“过”は本来の意味と何らかの関係で結びついている。

次に「“过”(＋名詞)」における領域内部の分類についてみてみよう。筆者の収集した領域別の分類では、空間名詞を用いている場合が最も多かったので、空間名詞によって領域内部の分類を試みよう。

3.2. 「“过”(＋名詞)」の“过”と結びつく空間名詞の特徴

“过”の後ろにはよく空間名詞が用いられる。上記の例文分析によれば、“过”の後ろには、範囲性名詞(例14：“草地”)と線条性名詞(例15：“街”)とが用いられている。「“过”＋空間名詞」は、これらの言語現象だけなのかどうか、次に作例により、“过”と空間名詞とを用いて検証してみよう。

(2.1) 他们过马路／河／长安街／和平街了。(作例)

彼らは道路／河／長安街／和平街を渡った。(筆者訳)

※“过”が「(その場所を)渡る／横切る」の意味であれば、客体には主体の渡る対象である線条性名詞“马路／河／长安街／和平街”などが用いられる。“过”の客

体としては、主体の渡る対象でない空間名詞“天安寺／銀行／县城／东南／飞机”などを用いることができない。

(2.2) 他们过独木桥／吊桥／人行横道／天桥了。(作例)

彼らは丸木橋／吊り橋／横断歩道／歩道橋を渡った。(筆者訳)

※“过”が「(その場所を)渡る」の意味であれば、客体には主体の渡る対象としての線条性の名詞“独木桥／吊桥／人行横道／天桥”などが用いられる。“过”の客体としては、主体の渡る対象でない空間名詞“天安寺／銀行／县城／东南／飞机”などを用いることができない。

(2.3) 他们摇船过河／黄河／长江了。(作例)

彼らは船を漕いで河／黄河／長江を渡った。(筆者訳)

※“过”が「(その場所を)渡る／横切る」の意味であれば、客体には主体の渡る対象としての線条性の名詞“河／黄河／长江”などが用いられる。“过”の客体としては、主体が船を漕いで渡る対象でない空間名詞“长安街／天安寺／銀行／县城／东南／飞机”などを用いることができない。

(2.4) 他们坐船过沼泽／湖／海了。(作例)

彼らは船で沼／湖／海を渡った。(筆者訳)

※“过”が「(その場所を)渡る」の意味であれば、客体には主体が船で渡る対象としての範囲性の名詞“沼泽／湖／海”などが用いられる。“过”の客体としては、主体が船で渡る対象でない空間名詞“长安街／天安寺／銀行／县城／东南／飞机”などを用いることができない。

(2.5) 过了长安街／和平街／金鱼胡同就到了。(作例)

長安街／和平街／金魚横丁を抜けるとすぐです。(筆者訳)

※“过”が「(その場所を)抜ける」の意味であれば、客体には道の長さが限定されている線条性の名詞“长安街／和平街／金鱼胡同”などが用いられる。“过”の客体には、文中に現れていない主体が「抜ける」対象でない空間名詞“天安寺／马路／銀行／东南／飞机”などを用いることができない。

(2.6) 过了草地／县城／草原就到了。(作例)

原っぱ／县城／草原を抜けるとすぐです。(筆者訳)

※“过”が「(その場所を)抜ける」の意味であれば、客体には範囲性の名詞“草地／县城／草原”などが用いられる。“过”の客体としては、文中に現れていない主体が「抜ける」対象でない空間名詞“马路／銀行／东南／飞机”などを用いることができない。

(2.7) 过了海关／剪票口／盘查哨所往右拐。(作例)

税関／改札口／検問所を通ったら右に曲がってください。(筆者訳)

※“过”が「(その場所を) 通る」の意味であれば、客体には範囲性名詞“海关／剪票口／盘查哨所”などが用いられる。“过”の客体としては、文中に現れていない主体が「通る」対象でない空間名詞“马路／银行／东南／飞机”などを用いることができない。

(2.8) 过了山／坡就看见我们的村庄了。(作例)

山／坂を越えると、私達の村が見えます。(筆者訳)

※“过”が「(その場所を) 超える」の意味であれば、客体には主体“我们”の越える対象としての角度性名詞“山／坡”などが用いられる。“过”の客体としては、主体の越える対象でない空間名詞“长安街／天安寺／马路／银行／东南／飞机”などを用いることができない。

(2.9) 松树长得过了房檐／屋顶了。(作例)

松が軒／屋根を越えた。(筆者訳)

※“过”が「(その場所を) 越える」の意味であれば、客体には主体“松树”が越えられる線条性名詞“房檐／屋顶”などが用いられる。“过”の客体としては、主体の越えられる対象でない空間名詞“长安街／天安寺／马路／银行／东南／飞机”などを用いることができない。

(2.10) 过了银行／天安寺就是照相馆。(作例)

銀行／天安寺を過ぎれば写真屋さんです。(筆者訳)

※“过”が「(その前を) 過ぎる」の意味であれば、客体には範囲性名詞“银行／天安寺”などが用いられる。“过”の客体としては、文中に現れていない主体がその前を過ぎる対象とならない空間名詞“马路／东南／飞机”を用いることができない。

(2.11) 飞机过了长江／秦岭了。(作例)

飛行機が長江／秦嶺山脈を通過した。(筆者訳)

※“过”が「(その上を) 通過する」の意味であれば、客体には主体“飞机”の通過する対象としての線条性名詞“长江／秦岭”¹³⁾が用いられる。“过”の客体としては、主体の通過する対象でない空間名詞“长安街／天安寺／马路／银行／东南／飞机”などを用いることができない。

(2.12) 飞机过了泰山／武夷山了。(作例)

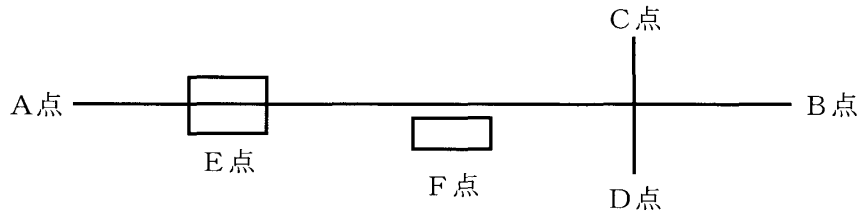
飛行機が泰山／武夷山を通過した。(筆者訳)

※“过”が「(その上を) 通過する」の意味であれば、客体には主体“飞机”の過ぎる対象としての範囲性名詞“泰山／武夷山”¹⁴⁾が用いられる。“过”の客体としては、主体の過ぎる対象でない空間名詞“长安街／天安寺／马路／银行／东南／飞机”などを用いることができない。

上記の分析から位置移動の動詞“过”は、線条性名詞“马路／河／独木桥／人行横道／房檐

／屋顶”・範囲性の名詞“公園／草地／县城／草原／银行／天安寺”・角度性の名詞“山／坡”の三類と必然的に組み合わせると言える。位置移動の動詞“过”と形状からみる三類の空間名詞との関係は、次のように整理できる。

[表7] 位置移動の動詞“过”と空間名詞との関係



- i. “过”と通過するところ（C点からD点へ）との結びつき：例（2.1）（2.2）（2.3）
- ii. “过”と通過するところ（A点からB点へ）との結びつき：例（2.4）（2.5）（2.6）
- iii. “过”と通過するところ（E点）との結びつき：例（2.7）（2.8）
- iv. “过”と通過するところ（C点とD点で示すところ）との結びつき：例（2.9）
- v. “过”と通過するところ（F点の前）との結びつき：例（2.10）
- vi. “过”と通過するところ（F点の上）との結びつき：例（2.11）（2.12）

上記の分析から、位置移動の動詞“过”で作る六類の通過の結びつき「“过”+空間名詞」は主体の通過移動する場所がどのような場所なのかによって、位置移動の動詞“过”が日本語では「(その場所を) 渡る、横切る」(例2.1, 2.2, 2.3, 2.4)・「(その場所を) 抜ける」(例2.5, 2.6)・「(その場所を) 通る」(例2.7)・「(その場所またはその前を) 越える」(例2.8, 2.9)・「(その前を) 過ぎる」(例2.10)・「(その上を) 通過する」(例2.11, 2.12)の六類の意味と対応する、とみなしてよいであろう。ただし、中国語の「“过”+空間名詞」の“过”は、基本的には「むすびつき」ごとにそれに対応する日本語があるが、すべてが一律に対応するというわけではないので注意する必要があるであろう。

上記の分析から中国語では「“过”+空間名詞」のなかの位置移動の動詞“过”は、空間名詞を形状からみる線条性の名詞“马路／河／长安街／独木桥／人行横道／房檐／屋顶”・範囲性の名詞“公園／草地／县城／草原／银行／天安寺”・角度性の名詞“山／坡”およびこの三類の作る空間名詞連語“这条马路, 这个公园, 这座山”¹⁵⁾と組み合わせると言える。そして、これら以外の空間名詞または空間名詞連語とは組み合わせられない、と言える。たとえば次の例である。

(2.13)*他们正好过我家门前。——▶他们正好从我家门前过。(作例)

彼らがちょうど我が家の前を通り過ぎた。(筆者訳)

(2.14)*飞机正好过我头上。——▶飞机正好从我头上过。(作例)

飛行機がちょうど頭上を通り過ぎた。(筆者訳)

(2.15) 一位老人从他身边过，看两眼，走过去又折回来，问小林理发多少钱？(7-12-111)

ふと、通りすがりの老人が彼をちらっと見て行きかけ、また引き返してきく、いくらかな？と林君に尋ねた。(7-12-110)

日本語であれば、例(2.13)の「わが家の前を通り過ぎた」、例(2.14)の「頭上を通り過ぎた」、例(2.15)の「通りすがりの老人(老人が彼のそばを通り過ぎる)」は、名詞の格が発達しているので、ヲ格の名詞連語と通過を意味する動詞とが組み合わさるが、中国語の位置移動の動詞“过”を用いて、“过我家门前／我头上／他身边”とは言えない。中国語の位置移動の動詞“过”が上掲の形状からみる三類の場所を表す空間名詞または空間名詞連語に属さない“我家门前／我头上／他身边”と組み合わさらないからである。この点からも中国語では動詞と名詞との組み合わせに動詞が名詞または名詞連語を選ぶと言う文法上のルールが存在すると言えるであろう。しかし、例(2.13)の「わが家の前を通り過ぎた」、例(2.14)の「頭上を通り過ぎた」、例(2.15)の「通りすがりの老人(老人が彼のそばを通り過ぎる)」は、現実として存在するので、中国語でもこの現実を表現しなければならない。これを中国語では例(2.13)(2.14)(2.15)のように客体を前置させる介詞という文法的な手段を用いて表現する。ここに介詞の必要性がでてくると言える。ここに介詞がなぜ発展してきたのかの理由の一つを知ることとなる。

中国語の連語による「通過のむすびつき」は上掲の例文中に示すように二単語が原則であるが、動詞と名詞との組み合わせに文法的なルールが存在するので、二単語で表現できない場合、介詞を用いて三単語または四単語で表現する。

なお、筆者の空間名詞の分類に基づけば¹⁶⁾、“我家门前／我头上”“他身边”は前者が方位名詞連語であり、後者が部分場所名詞連語である。

3.3. 「動詞+“过”(＋名詞)」の“过”

ここで、『八』の分類による「動詞+“过”(＋名詞)」における趨向動詞“过”の意味分類(p. 138～139)についてみてみよう。

- (22) 我接过奖状走下台去。(『八』 p. 139)
私は賞状を受け取ると台の下へ降りた。(同上)
- (23) 他递过一块热毛巾给我。(『八』 p. 139)
彼は熱いタオルを私に渡してくれた。(同上)
- (24) 他回过头看见了我。(『八』 p. 139)
彼は振り向いて私を見た。(同上)
- (25) 请再翻过一页。(『八』 p. 139)
もう一ページめくってください。(同上)
- (26) 明天早晨六点钟的火车，你可千万别睡过了。(『八』 p. 139)
明日朝六時の汽車だから、絶対に寝過ぎないように。(同上)
- (27) 他一不留神使过了劲。(『八』 p. 139)

- 彼は不注意で力を入れすぎた。(同上)
- (28) 这一次比过他们了。(『八』 p. 139)
今回は彼らよりよかった。(同上)
- (29) 一台机器的生产能力抵得过几十个人。(『八』 p. 139)
機械一台の生産能力は数十人の力にまさる。(同上)
- (30) 飞机飞过了秦岭。(『八』 p. 139)
飛行機が秦嶺山脈を通過した。(同上)
- (31) 我游不过这条河。(『八』 p. 139)
ぼくにはこの川は泳いで渡れない。(同上)
- (32) 哟！我们坐过了站了。(『八』 p. 139)
あれ、乗り過ぎてしまいましたよ。(同上)
- (33) 咱俩光顾说话，已经走过新华书店了。(『八』 p. 140)
おしゃべりに夢中になって、新華書店を通り過ぎてしまったわ。(同上)
- (34) 向日葵已经长得高过人头了。(『八』 p. 140)
ヒマワリがもう人の頭より高くなった。(同上)
- (35) 现在的技术比起以前来，不知要强过多少倍。(『八』 p. 140)
現在の技術は、以前に比べ何倍優れているかしのれない。(同上)

[表 8] 『八』による趨向動詞“过”の意味分類¹⁷⁾

オ. 動詞+“过” [+名詞] : 例 (22) ~ (29)

名詞は一般に動作の対象となるもの。動作の主体のこともある。ふつう動詞と“过”の間に“得・不”を挿入できない。

a : ひとや事物が動作の結果ある場所を通過すること、ある場所から別の場所へ移る事を表す。例 (22) (23)

b : 物体が動作によって方向を変えることを表す。例 (24) (25)

c : 動作が時間その他の面で妥当な限界を超えることを表す。例 (26) (27)

d : まさっていることを表す。例 (28) (29)

カ. 動詞+“过”+名詞(場所) : 例 (30) ~ (33)

a : 動作がある場所を通過することを表す。例 (30) (31)

b : 目的の場所を越えることを表す。例 (32) (33)

キ. 形容詞+“过” [+名詞] : 例 (34) (35)

超過したことを表す。例 (34) (35)

「動詞+“过”」とその客体とで作る出来事は「動詞+“过”」の客体が何かによって領域別の分

類を作れる。「動詞+“过”」の客体は例(30, 31, 32, 33)が「場所」、例(26)は客体がないが、出来事は「時間」を示している。例(25, 27, 35)が「コト」、例(22, 23)が「モノ」で、例(28)(29)が「ヒト」、例(24, 34)が「カラダ」である。ここで、領域別の分類と「動詞+“过”」との関係について調べてみよう。

「動詞+“过”」の“过”の基本義は「過ぎる」である。「動詞+“过”」の“过”は次のように何類かの領域別の客体とむすびつき派生義が生じるが、何らかの意味で基本義と関係し、その基本義から逸脱することはない。

「動詞+“过”」の“过”が場所を示す空間名詞とむすびつくと、例(30, 31, 32, 33)のように用いられる。「動詞+“过”」の“过”は範囲性名詞(例30, 32, 33)と線条性名詞(例31)とむすびつく。“过”を用いる出来事は例(30)が“飞过了秦岭”で、例(32)が“坐过了站”で、例(33)が“走过新华书店”であり、これらの連語が成立するのは、“秦岭”が線条性名詞であり、“站, 新华书店”が範囲性名詞だからである。「動詞+“过”」の“过”は主体がある場所やその脇を「通過する」の意味である。“过”の基本義は「過ぎる」だが、範囲性名詞と結びつくことによって、「通過する」の意味が派生したといえるであろう。例(34)の“人头”はカラダ名詞だが、“高过人头”のなかで、“过”は主体が場所とみなす“人头”を「通過する」の意味として使われているので、本稿では“人头”について、空間を示せる名詞とみなしている。高橋(2003c)によれば「場所を示せる許容空間名詞」である。例(31)が“游不过这条河”と言えるのは、“这条河”の“河”が線条性名詞だからである。“游不过这条河”の“过”は主体がある場所を「渡る」の意味を示している。“过”の基本義は「過ぎる」だが、線条性名詞と結びつくことによって、「渡る」の意味が派生したといえるであろう。

「動詞+“过”」の“过”が時間と関係すると、例(26)のように用いられる。例(26)には客体としての時間名詞が文中に現れていないが、“过”は主体が設定時間を「越える」の意味である。“过”の基本義は「過ぎる」だが、設定時間と関係することによって、「越える」の意味が派生したといえるであろう。

「動詞+“过”」の“过”がコト名詞とむすびつくと、例(27)(35)のように用いられる。例(27)の“劲”は抽象名詞だが、“使过了劲”が「コト」を表すので、このなかに用いられることによって、やはりコト名詞とみなされる。「動詞+“过”」の“过”は「(基準を)越える」の意味である。“过”の基本義は「過ぎる」だが、コト名詞と結びつくことによって、「(基準を)越える」の意味が派生したといえるであろう。例(35)の“多少倍”は数量連語であるが、“强过多少倍”が「コト」をあらわすので、このなかに用いられることによって、コト名詞なみに扱われ、コト名詞とみなされる。「動詞+“过”」の“过”は客体との比較による「まさる」の意味を示す。“过”の基本義は「過ぎる」だが、コト名詞と結びつくことによって、これらの意味が派生したといえるであろう。

「動詞+“过”」の“过”がモノ名詞と結びつくと、例(22, 23)のように用いられる。客体が

手渡せるものであれば、どんなものであってもよい。「動詞+“过”」の“过”は客体としての「(モノの) 移動」を示す。“过”の基本義は「過ぎる」だが、モノ名詞と結びつくことによって、「(モノの) 移動」の意味が派生したといえるであろう。

「動詞+“过”」の“过”がヒト名詞と結びつくと、例(28, 29)のように用いられる。「動詞+“过”」の“过”の客体は主体の対象となれるヒト名詞が用いられる。「動詞+“过”」の“过”は主体が客体より「優れる/まさる」の意味を示す。“过”の基本義は「過ぎる」だが、ヒト名詞と結びつくことによって、主体が客体より「優れる/まさる」の意味が派生したといえるであろう。

「動詞+“过”」の“过”がカラダ名詞(全体の中の部分)とむすびつくと、例(24)のように用いられる。例(25)の“一页”も全体の中の部分という意味で、本稿ではカラダ名詞なみに扱う。「動詞+“过”」の動詞は方向転換を示し、“过”は方向転換のための客体の「移動」を示すので、客体には方向転換できるカラダ名詞が用いられる。“过”の基本義は「過ぎる」だが、カラダ名詞と結びつくことによって、「移動する」の意味が派生したと言えるであろう。

[表9] 「動詞+“过”(＋名詞)」の“过”と結びつく領域別の客体

- ア. 場所：例(30)(31)(32)(33)(34)
- イ. 時間：[例(26)]
- ウ. コト：例(27)(35)
- エ. モノ：例(22)(23)
- オ. ヒト：例(28)(29)
- カ. カラダ：例(24)(25)

「動詞+“过”」の“过”が領域別の名詞とむすびつくことによって、基本義以外が派生義としての多義語となる。しかし、「動詞+“过”」の“过”と領域別の名詞とがむすびついて、派生義としての多義語となっても、「動詞+“过”」の“过”は本来の意味と何らかの関係で結びついている。

次に「動詞+“过”(＋名詞)」における領域内部の分類についてみてみよう。筆者の収集した領域別の分類では、空間名詞を用いている場合が最も多かったので、空間名詞によって領域内部の分類をしてみよう。

3.4. 「動詞+“过”(＋名詞)」のなかの“过”と結びつく空間名詞の特徴

「動詞+“过”＋空間語」のなかの“过”の後ろにはよく空間名詞が用いられる。上記の例文分析によれば、“过”の後ろには、線条性名詞(例30, 31)と範囲性名詞(例32, 33)とが用いられている。

“过”の基本義は「過ぎる」だが、「動詞+“过”＋空間語」のなかの“过”の日本語訳は多様

である。3.3節に挙げる「動詞+“过”+空間語」の「動詞+“过”」の“过”は五類の意味と対応している。五類とは上記に挙げる「(運動の方式+) 通過する」(例30)、「(運動の方式+) 通り越す」(例33)、「(状態+) 越える」(例34)によって、参照点の上(例30)・傍(例33)・前(例34)を通過する場合、および「(運動の方式+) 渡る」(例31)・「(運動の方式+) 過ぎる」(例32)によって、その場所を通過する場合である。「動詞+“过”+空間名詞」構造は、これらの言語現象だけなのかどうか、作例により、「動詞+“过”+空間名詞」の構造のなかに用いられる「動詞+“过”」と空間名詞とを用いて検証してみよう。

(4.1) 他们走过马路/小溪/长安街/和平街了。(作例)

彼らは道路/小川/長安街/和平街を歩いて渡った。(筆者訳)

※「“走”+“过”」の動詞“走”は運動の方式を表し、“过”は「(その場所を) 渡る/横切る」の意味を表す。“走过”の客体には主体“他们”が行う「運動の方式+渡る」の対象である線条性の名詞“马路/小溪/长安街/和平街”などが用いられる。“走过”の客体として、主体が行う「運動の方式+渡る」の対象でない空間名詞“银行/县城/东南/飞机”などを用いることはできない。

(4.2) 他们走过独木桥/吊桥/人行横道/天桥了。(作例)

彼らは丸木橋/吊り橋/横断歩道/歩道橋を歩いて渡った。(筆者訳)

※「“走”+“过”」の動詞“走”は運動の方式を表し、“过”は「(その場所を) 渡る」の意味を表す。“走过”の客体には主体“他们”が行う「運動の方式+渡る」の対象である線条性の名詞“独木橋/吊橋/人行横道/天桥”などが用いられる。“走过”の客体として、主体が行う「運動の方式+渡る」の対象でない空間名詞“银行/县城/东南/飞机”などを用いることはできない。

(4.3) 我游不过滦河/黄河。(作例)

私は滦河/黄河を泳いでわたれない。(筆者訳)

※「“游”+“过”」の動詞“游”は運動の方式を表し、“过”は「(その場所を) わたる」の意味を表す。“游过”の客体には主体“我”が行う「運動の方式+渡る」の対象である線条性の名詞“滦河, 黄河”などが用いられる。“游过”の客体としては、主体が行う「運動の方式+渡る」の対象でない空間名詞“长安街/银行/县城/东南/飞机”などを用いることはできない。

(4.4) 我游不过太湖/密云水库。(作例)

私は太湖/密雲ダムを泳いでわたれない。(筆者訳)

※「“游”+“过”」の動詞“游”は運動の方式を表し、“过”は「(その場所を) 渡る」の意味を表す。“游过”の客体には主体“我”が行う「運動の方式+渡る」の対象である範囲性の名詞“太湖, 密云水库”などが用いられる。“游过”の客体としては、主体が行う「運動の方式+渡る」の対象でない空間名詞“长安街/银行/县城/东南

／飞机”などを用いることはできない。

(4.5) 他穿过长安街／金鱼胡同／王府井大街往右拐了。(作例)

彼は長安街／金魚横丁／王府井大通り抜けると右にまがった。(筆者訳)

※「“穿”+“过”」の動詞“穿”は運動の方式を表し、“过”は「(その場所を)抜ける」の意味を表す。“穿过”の客体には主体“他”が行う「運動の方式+抜ける」の対象である線条性的名詞“长安街, 金鱼胡同, 王府井大街”などが用いられる。“穿过”の客体としては、主体“他”が行う「運動の方式+抜ける」の対象でない空間名詞“马路／银行／东南／飞机”などを用いることはできない。

(4.6) 他走过公园／草地／天安门广场, 然后坐车去了。(作例)

彼は公園／原っぱ／天安門広場を抜けると、バスに乗って行った。(筆者訳)

※「“走”+“过”」の動詞“走”は運動の方式を表し、“过”は「(その場所を)抜ける」の意味を表す。客体には主体“他”が行う「運動の方式+抜ける」の対象である範囲性的名詞“公园, 草地, 天安门广场”などが用いられる。“走过”の客体としては、主体“他”が行う「運動の方式+抜ける」の対象でない空間名詞“马路／银行／东南／飞机”などを用いることはできない。

(4.7) 走过了海关／剪票口／盘查哨所往右拐。(作例)

税関／改札口／検問所を通ったら右に曲がってください。(筆者訳)

※「“走”+“过”」の動詞“走”は運動の方式を表し、“过”は「(その場所を)通る」の意味を表す。客体には文中に現れていない主体が行う「運動の方式+通る」の対象である範囲性的名詞“海关／剪票口／盘查哨所”などが用いられる。“走过”の客体としては、文中に現れていない主体が行う「運動の方式+通る」の対象でない空間名詞“马路／银行／东南／飞机”などを用いることができない。

(4.8) 爬过了山／坡就看见我们的村庄了。(作例)

山／坂を越えると、私達の村が見えます。(筆者訳)

※「“爬”+“过”」の動詞“爬”は運動の方式を表し、“过”は「(その場所を)超える」の意味を表す。客体には文中に現れていない主体“我们”の行う「運動の方式+越える」の対象である角度性的名詞“山／坡”などが用いられる。“爬过”の客体としては、主体が越える対象でない空間名詞“天安寺／长安街／马路／银行／东南／飞机”などを用いることができない。

(4.9) 他把孩子抱起来, 高高举过了头顶／门框／肩膀。(作例)

彼は子供を抱くと、頭／ドア／肩より高くあげた。(筆者訳)

※「“举”+“过”」の動詞“举”は運動の方式を表し、“过”は「(ある基準を)越える」の意味を表す。客体には主体“他”が抱きあげる“孩子”の越えられる基準点としての線条性的名詞“头顶／门框／肩膀”などが用いられる。“举过”の客体としては、

主体“他”が抱きあげる“孩子”の越えられる対象でない空間名詞“天安门广场／长安街／马路／银行／东南／飞机”などを用いることができない。

(4.10) 咱们光顾说话，已经走过新华书店／城乡超市／松鹤宾馆了。(作例)

話に夢中になっていて、もう新華書店／城郷スーパー／松鶴ホテルを乗り越してしまった。(筆者訳)

※「“走”+“过”」の動詞“走”は運動の方式を表し、“过”は「(その前を) 通りこす」の意味を表す。客体には主体“咱们”の行う「運動の方式+通り越す」の対象である目的地としての範囲性名詞“新华书店, 城乡超市, 松鹤宾馆”などが用いられる。

“走过”の客体としては、主体“咱们”がその前を乗り越す対象とならない空間名詞“马路／东南／飞机”などを用いることができない。

(4.11) 飞机飞过了长江／秦岭了。(作例)

飛行機が長江／秦嶺山脈を通過した。(筆者訳)

※「“飞”+“过”」の動詞“飞”は運動の方式を表し、“过”が「(ある場所の上を) 通過する」の意味であれば、客体には主体“飞机”が通過する線条性名詞“长江／秦岭”などが用いられる。“飞过”の客体としては、主体“飞机”が通過する対象でない空間名詞“长安街／马路／银行／东南／飞机”などを用いることができない。

(4.12) 飞机飞过了泰山／武夷山了。(作例)

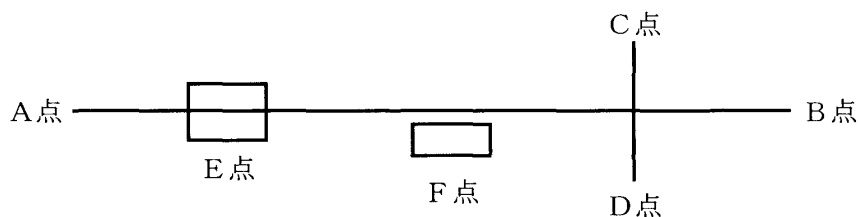
飛行機が泰山／武夷山を通過した。(筆者訳)

※「“飞”+“过”」の動詞“飞”は運動の方式を表し、“过”が「(ある場所の上を) 通過する」の意味を表す。客体には主体“飞机”が通過する範囲性名詞“泰山／武夷山”などが用いられる。“过”の客体としては、主体“飞机”が通過する対象でない空間名詞“长安街／马路／银行／东南／飞机”などを用いることができない。

上記の分析から「動詞+“过”+空間名詞」のなかの位置移動の動詞“过”は、線条性名詞“河, 小径, 头顶, 房檐”・範囲性名詞“湖, 公园”・角度性名詞“山, 坡”と組み合わせると言える。

「動詞+“过”+空間名詞」のなかの位置移動の動詞“过”および形状から見る三類の場所を表す名詞との関係は、次のように整理できる。

[表10] 「動詞+“过”+空間名詞」のなかの位置移動の動詞“过”と空間名詞との関係



- i. “过”と通過するところ（C点からD点へ）との結びつき：例（4.1）（4.2）（4.3）
- ii. “过”と通過するところ（A点からB点へ）との結びつき：例（4.4）（4.5）（4.6）
- iii. “过”と通過するところ（E点）との結びつき：例（4.7）（4.8）
- iv. “过”と通過するところ（C点とD点で示すところ）との結びつき：例（4.9）
- v. “过”と通過するところ（F点の前）との結びつき：例（4.10）
- vi. “过”と通過するところ（F点の上）との結びつき：例（4.11）（4.12）

※ [表10] では参照点に隣接しているので、F点の傍と前を同一グループ(v)に入れている。

上記の分析から、位置移動の動詞“过”で作る「通過の結びつき」（「動詞+“过”+空間名詞」）の中の動詞はいずれも運動の方式を示すが、主体の通過する場所がどのような場所なのかによって、位置移動の動詞“过”の基本義「過ぎる」は、「通過のむすびつき」を作るむすびつきのなかで意味が修正されていき、日本語では「（ある場所を）渡る」（例4.1, 4.2, 4.3, 4.4）・「（ある場所を）抜ける」（例4.5, 4.6）・「（ある場所を）通る」（例4.7）・「（その場所またはその前を）越える」（例4.8, 4.9）・「（その前を）通り越す／通り過ぎる」（例4.10）・「（その上を）通過する」（例4.11, 4.12）の六類の意味と原則的に対応するとみなしてよいであろう。

本節の「動詞+“过”+空間名詞」構造の「動詞+位置移動の動詞“过”」と空間名詞との関係は、3.2節の「“过”+空間名詞」構造の位置移動の動詞“过”と空間名詞との関係と同じで、通過の結びつきは六類あり、それに対応する日本語も原則として六類である。

上記の分析から中国語では「動詞+“过”+空間名詞」のなかの「動詞+“过”」は、線条性の名詞“河, 马路, 头顶, 房檐”・範囲性的名詞“湖, 公园”・角度性的名詞“坡, 山”およびこの三類の作る空間名詞連語“这条河, 这个湖, 这座山”と組み合わせるが、これら以外の空間名詞または空間名詞連語とは組み合わせられないと言える。たとえば次の例である。

(4.13)*他们走过新华书店前边了。—▶ 他们从新华书店前边走过了。(作例)

彼らが新華書店の前を通り過ぎた。(筆者訳)

(4.14)连那些已经当了爸爸的人, 在她身边走过时, 也忍不住要回转头看上两眼。(12-6-50)

もう父親になっている人間でさえ、彼女とすれちがうと、思わずふりかえって見ずにはおられなかった。(12-6-61)

(4.15)一位看上去挺漂亮的少妇, 迈着轻盈的步子从丈夫们站成的通道中走过。(10-5-87)

まず最初はとびきりきれいな若妻で、軽い足取りで旦那たちの作った通路を歩いていった。(10-5-86)

日本語であれば、例（4.13）の「新華書店の前を通り過ぎた」、例（4.14）の「彼女とすれちがう（彼女のそばを通り過ぎる）」、例（4.15）の「旦那たちの作った通路を歩いていった」は、名詞の格が発達しているので、ヲ格の名詞連語と通過を意味する動詞とが組み合わせるが、中国語では位置移動の動詞“过”を用いて“走过新华书店前边／她身边／丈夫们站成的通道中”と言

えない。これは中国語の「動詞+“过”」が上掲の形状別に見る三類の場所を表す空間名詞または空間名詞連語に属していない“新华书店前边, 她身边, 丈夫们站成的通道中”と組み合わせられないからである。これらの日本語は中国語の「動詞+“过”+空間名詞」では表現できないが、現実として存在するので、中国語でもそれを表現する必要性が生じてくる。これを中国語では例(4.13)(4.14)(4.15)のように、動詞の前に客体を前置させる介詞という文法的な手段を用いて表現する。ここに介詞の必要性がでてくると言える。

なお、筆者の言う空間名詞の分類に基づけば、“新华书店前边/她身边”“丈夫们站成的通道中”は前者が部分場所名詞連語であり、後者が方位名詞連語である。

3.5. 位置移動の動詞“过”

高橋(2003c)でいう位置移動の動詞“过”は、『八』では動詞と趨向動詞とに分けている。しかし、“过”の基本義は「過ぎる」なので、あるいは高橋の言うように一類とみなす方がよいかもしれない。ここで、筆者の分析による既述の『八』の動詞“过”と趨向動詞“过”の用法について比較してみよう。まず、動詞“过”と趨向動詞“过”と結びつく領域別の客体を比較してみよう。

[表6]「“过”(＋名詞)」の“过”とむすびつく領域別の客体

- ア. 場所: 例(13)(14)(15)
- イ. 時間: 例(16)(17)(18)(19)
- ウ. コト: 例(20)(21)

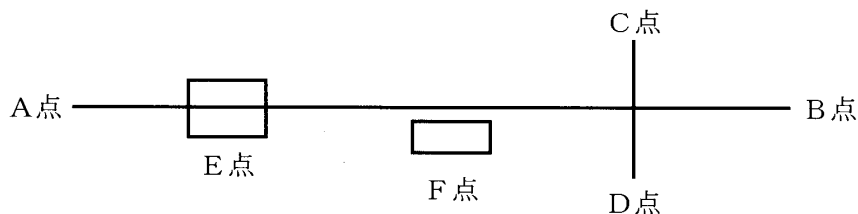
[表8]「動詞+“过”(＋名詞)」の“过”と結びつく領域別の客体

- ア. 場所: 例(30)(31)(32)(33)(34)
- イ. 時間: [例(26)]
- ウ. コト: 例(27)(35)
- エ. モノ: 例(22)(23)
- オ. ヒト: 例(28)(29)
- カ. カラダ: 例(24)(25)

[表6]は『八』でいう動詞“过”であり、[表8]は趨向動詞“过”である。どちらの“过”も領域別の分類では「場所、時間、コト」と結びつく。趨向動詞の“过”はさらに「モノ、ヒト、コト」と結びついている。『八』でいう趨向動詞“过”は結びつく領域が拡大されているが、これは“过”の前に用いる動詞の影響をうけて領域が拡大したのであろう。なぜなら、領域別のむすびつきのなかに用いられる“过”の表す意味は多様であっても、“过”の基本義「過ぎる」となんらかの関係があり、派生義として捉えることができるからである。

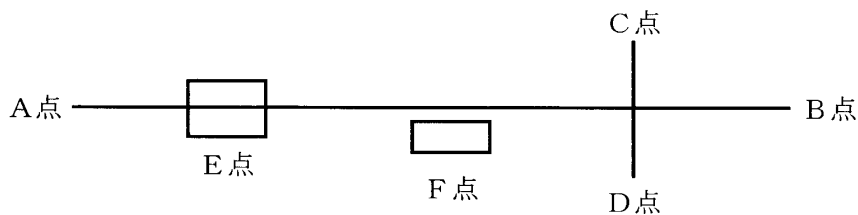
次に、『八』でいう動詞と趨向動詞の“过”が筆者の言う既述の「通過のむすびつき」に用いられる空間名詞との関係についてみてみよう。

[表7] 「“过”+空間名詞」のなかの“过”と空間名詞との関係



- i. “过”と通過するところ（C点からD点へ）との結びつき：例（2.1）（2.2）（2.3）
- ii. “过”と通過するところ（A点からB点へ）との結びつき：例（2.4）（2.5）（2.6）
- iii. “过”と通過するところ（E点）との結びつき：例（2.7）（2.8）
- iv. “过”と通過するところ（C点とD点で示すところ）との結びつき：例（2.9）
- v. “过”と通過するところ（F点の前）との結びつき：例（2.10）
- vi. “过”と通過するところ（F点の上）との結びつき：例（2.11）（2.12）

[表10] 「動詞+“过”+空間名詞」のなかの“过”と空間名詞との関係



- i. “过”と通過するところ（C点からD点へ）との結びつき：例（4.1）（4.2）（4.3）
- ii. “过”と通過するところ（A点からB点へ）との結びつき：例（4.4）（4.5）（4.6）
- iii. “过”と通過するところ（E点）との結びつき：例（4.7）（4.8）
- iv. “过”と通過するところ（C点とD点で示すところ）との結びつき：例（4.9）
- v. “过”と通過するところ（F点の前）との結びつき：例（4.10）
- vi. “过”と通過するところ（F点の上）との結びつき：例（4.11）（4.12）

[表7]は『八』でいう動詞“过”であり、[表10]は趨向動詞“过”である。どちらの“过”も空間名詞との関係では「i, ii, iii, iv, v, vi」に分類できる。『八』でいう動詞“过”と趨向動詞“过”とは、文中で用いられる位置が違うだけであり、“过”と空間名詞との関係では同じである。この点から、“过”は『八』で言う動詞と趨向動詞とに分けるよりも高橋で言う位置移動の動詞とみなすほうが、より言語事実に即しているようである。

4. おわりに

位置移動の動詞“过”の基本義は「過ぎる」である。“过”は異なる領域と領域内部とのむすびつきにより、派生義が生じる。それらは以下の通りである。

一. 「“过”(＋名詞)」

領域別による“过”の基本義「過ぎる」と派生義

- i. 「“过”＋空間名詞」(例13～15)：(ある場所を)通過する、越える
- ii. 「“过”＋時間名詞」(例16～19)：(時間が)過ぎる、(時間を)過ごす／過ぎる
- iii. 「“过”＋コト名詞」(例20, 21)：(あるコトに)対処する

領域内部「通過のむすびつき」(“过”＋空間名詞)における“过”の基本義「過ぎる」と派生義

- i. “过”＋線条性名詞(例2.1, 2.2, 2.3)／範囲性名詞(例2.4)：(その場所を)渡る、横切る
- ii. “过”＋線条性名詞(例15, 2.5)／範囲性名詞(例2.6)：(その場所を)抜ける
- iii. “过”＋線条性名詞(例2.11)／範囲性名詞(例2.12)：(その上を)通過する
- iv. “过”＋線条性名詞(例2.9)／範囲性名詞(例14)／角度性名詞(例2.8)：(その場所を)越える
- v. “过”＋範囲性名詞(例2.7)：(その場所を)通る
- vi. “过”＋範囲性名詞(例2.10)：(その前を)通り過ぎる

二. 「動詞＋“过”(＋名詞)」

領域別による“过”の基本義「過ぎる」と派生義

- i. 「動詞＋“过”＋空間名詞」(例30～34)：(ある場所を)通過する、渡る
- ii. 「動詞＋“过”＋時間名詞」[例(26)]：(ある時間を)越える
- iii. 「動詞＋“过”＋コト名詞」(例(27, 35))：(客体との比較)越える／まさる
- iv. 「動詞＋“过”＋モノ名詞」(例22, 23)：(モノ客体の)移動
- v. 「動詞＋“过”＋ヒト名詞」(例28, 29)：(ヒト客体より)優れる／まさる
- vi. 「動詞＋“过”＋部分(カラダ／モノ)名詞」(例24, 25)：(部分客体の)方向転換による移動

領域内部「通過のむすびつき」(動詞＋“过”＋空間名詞)における“过”の基本義「過ぎる」と派生義

- i. “过”＋線条性名詞(例31, 4.1, 4.2, 4.3)／範囲性名詞(例4.4)：(その場所を)渡る、横切る
- ii. “过”＋線条性名詞(例4.5)／範囲性名詞(例4.6)：(その場所を)抜ける、通過する
- iii. “过”＋線条性名詞(例30, 4.11)／範囲性名詞(例4.12)：(その上を)通過する

- iv. “过”+線条性的名詞（例34, 4.9）／角度性的名詞（例4.8）：（その場所を）越える
- v. “过”+範圍性的名詞（例4.7）：（その場所を）通る
- vi. “过”+範圍性的名詞（例32, 33, 4.10）：（その前を）通り過ぎる

上記の分析から、“过”は述語動詞と補語動詞の位置に用いられるが、基本的な機能は同一とみなせるので、“过”を動詞と趨向動詞とに分けるのではなく、位置移動の動詞とみるほうが言語事実により即しているであろう。なお、“过”の派生義は上記の分析から領域の違いによるむすびつきと領域内部の違いによるむすびつきとによって生じるといえる。

-
- 1) 高橋弥守彦（2004）では位置移動の動詞を“上, 下, 进, 出, 回, 过, 开, 起, 近”と“朝, 向, 往, 到, 在, 离”との二類（p. 20）に分けている。
 - 2) 呂叔湘（1992）によれば、筆者の言う位置移動の動詞“过”を動詞と趨向動詞とに分けている（p. 138～140）。
 - 3) 朴鐘漢（2000）に認知言語学の立場から“过”の意味拡張について述べている論文がある。
 - 4) 奥田靖雄（1976）によれば多義語の意味変化は「むすびつき」のなかに現れるとしている。
 - 5) 鈴木重行・鈴木康之（1983）に「くみあわせ」と「むすびつき」の術語あり。
 - 6) 高橋弥守彦（2004）では連語論の立場から位置移動の動詞“过”の意味拡張について若干触れている。
 - 7) 呂叔湘（1992）によれば、筆者の言う位置移動の動詞“过”を動詞と趨向動詞とに分け、動詞“过”には四類の意味があり、趨向動詞“过”には三類の意味があるとしている（p. 138～140）。
 - 8) 朴鐘漢（2000）では、認知文法の意味拡張に於ける「領域の転換」などの立場から、『八』でいうところの動詞“过”の表す四類の意味分類を説明している（p. 25～28）。
 - 9) 荒屋勸（1995）では、“过”を三類の意味「1. 突き抜ける、通り過ぎる、わたる 2. 過ごす 3. (ある処理、方法を) 通す」（p. 260）に分けている。
 - 10) 吉田賢抗（1984）によれば、「過」の第一義は「過ぎる」である。筆者はこの説を支持する。朴鐘漢（2000）ではプロトタイプ意味を「ある地点から、何らかの空間を經由して、別の地点に移動」としている。その根拠として《現代汉语词典》“过”の第一義“①从一个地点或时间移到另一个地点或时间；经过某个空间或时间。”を挙げている。
 - 11) 高橋弥守彦（2004）によれば位置移動の動詞“过”は線条性的名詞“马路, 河”・範圍性的名詞“银行, 草原”・線条性兼範圍性的名詞“桥, 长安街”とむすびつくとしている。
 - 12) 朴鐘漢（2000）は「領域の転換」のなかで、「以下は移動領域が空間から時間に転換した例である」として次の二例を挙げ説明している。

你回广州过春节吗？

我爸爸正过着幸福的晚年。

中国人は「正月を祝う」ということを「正月期間」を人が通過すると概念化し、このように表現する。すなわち移動物“你”や“我爸爸”が“春节”や“幸福的晚年”という時間領域を通過するという形で表現するのである。

動作主体のある文であれば、朴鐘漢のように解釈してもかまわないであろうが、例(16)や(18)のような、動作主体のない文であれば、筆者のように解釈するしかないので、朴鐘漢の説明にはやや無理があるようである。

- 13) 例(2.11)の“飞机过了长江／秦岭了。”の主体“飞机”の通過を示す“过”の対象“长江／秦岭”は、主体との関係で線条を表しているので線条性の名詞だが、このうちの“秦岭”は“他们正在上秦岭呢。”「彼らは秦嶺山脈を上っているところです」とも言える。この文中の“上秦岭”(移動のむすびつき:「秦嶺山脈をのぼる」)の“秦岭”は、主体“他们”の移動する(のぼる)対象なので、その形状から角度性の名詞と言え。このように一部の空間名詞は主体の運動との関係で同じ名詞であっても、主体が名詞の有するどの側面と関係するかにより、同じ空間名詞であっても二類に分かれる場合がある。
- 14) 例(2.12)の“飞机过了泰山／武夷山了。”の主体“飞机”の通過を示す“过”の対象“泰山／武夷山”は、主体との関係で範囲を表しているので範囲性の名詞だが、“他们正在上泰山／武夷山呢。”の“上泰山／武夷山”(移動のむすびつき:「泰山／武夷山をのぼる」)の“泰山／武夷山”は、主体“他们”の移動する(のぼる)対象なので、その形状から角度性の名詞と言え。このように一部の空間名詞は主体の運動との関係で同じ名詞であっても、主体が名詞の有するどの側面と関係するかにより、同じ空間名詞であっても二類に分かれる場合がある。
- 15) 「“过”+空間名詞」のなかの位置移動の動詞“过”は、空間名詞を形状からみる線条性・範囲性・角度性・範囲性・角度性・範囲性・角度性の三類と組み合わせたり、「通過のむすびつき」を作る。この三類の空間名詞が中心となる連語も、この三類の空間名詞と同じように、位置移動の動詞“过”と組み合わせたり、「通過のむすびつき」を作る。
- 他们过这条马路了。(線条性・範囲性・角度性・範囲性・角度性・範囲性・角度性) 連語
彼らはこの大通りを渡った。
- 他们过这个公园了。(範囲性・角度性・範囲性・角度性・範囲性・角度性) 連語
彼らはこの公園をぬけた。
- 他们过这座山了。(角度性・範囲性・角度性・範囲性・角度性・範囲性) 連語
彼らはこの山を越えた。
- 16) 高橋弥守彦(2003b)によれば空間名詞を次のように分類している(P.50)。

[表1] 空間詞

1. 固有名詞：池袋，王府井…	}	1. 自然地理名詞：山，草原…
2. 場所名詞：_____		2. 人工築造名詞：路，校园…
3. 方位詞：前，东…		3. 組織単位名詞：矿，銀行…
4. 指示代詞：这儿，那儿		4. 行政区域名詞：省，县城…
5. 物名詞：车，飞机		5. 部分場所名詞：边，角落…

17) 呂叔湘 (1992) に趨向動詞“过”の意味分類あり (P.139~140)。

資料と例文

1. 水仙 (1984) 水上勉著 柯森耀译注 上海译文出版社 1984.10
2. 菜穗子 (1984) 堀辰雄著 吴大有译注 上海译文出版社 1984.12
3. ショートショート (1988) 程枫等著 人民中国杂志社 1988.1~12
4. ショートショート (1989) 李玲等著 人民中国杂志社 1989.1~12
5. ショートショート (1990) 李敬寅等著 人民中国杂志社 1990.1~12
6. ショートショート (1991) 杨华敏等著 人民中国杂志社 1991.1~12
7. ショートショート (1993) 赵冬等著 人民中国杂志社 1993.1~12
8. ショートショート (1994) 凌鼎年等著 人民中国杂志社 1994.1~12
9. ショートショート (1995) 航鷹等著 人民中国杂志社 1995.1~12
10. ショートショート (1996) 关继尧等著 人民中国杂志社 1996.1~12
11. ショートショート (1997) 林如求等著 人民中国杂志社 1997.1~12
12. 中国語学講読シリーズ①~⑥ (1991) 刘家林等著 柯森耀译 外文出版社
13. 中国当代优秀童话选上・下 (1991) 柯玉生編 新雷出版社 1991.11
14. 那山・那人・那狗 (1993) 彭见明著 中川正行、木村英樹、沈国威、小野秀樹 白帝社
2001.10.1
15. 文芸副刊・中国語の環第40号~48号 敖友余等著 竹島毅等整理 1997.6~1999.6
16. 中日対訳コーナー・北京週報 2000.1.4~2000.12.12
17. 贾平凹小说新作集 (2001) 贾平凹 中国青年出版社 2001.8
18. 中日対译语料库 (2003) 北京日本学中心中日対译语料库 (2003) 北京日本学中心

※例文の末尾に (12-2-24) と記してあれば、上記資料12の二冊目の24頁の意。上記に挙げた資料以外の引用例であれば、やはり例文末尾の括弧の中に資料名の略称と頁数が挙げられている。出典の記していない例文は、筆者が作例し、大東文化大学非常勤講師の鄭曉青・王学群・趙昕・鄭曙光の4先生が手を加えて下さったものである。また、中日対訳研究会月例会で発表した際には多くの先生方から貴重な意見を頂いた。ここに、あわせて感謝の意を表す。

主要参考文献と略称

1. 荒川清秀 (2003) 『一步すすんだ中国語文法』, 大修館書店 『清』
2. 荒屋勸 (1995) 『中国語常用動詞例解辞典』, 光生館 『荒』
3. 大内田三郎 (2000) 『中国語文法参考書』, 駿河台出版社 『大』
4. 奥田靖雄 (1976) 「言語の単位としての連語」『言葉の研究・序説』(1985) 言語学研究会編
に所収 むぎ書房
5. 郭春貴 (2001) 『誤用から学ぶ中国語』, 白帝社 『郭』
6. 簡能道明 (1955) 『増補字源』, 角川書店 『簡』
7. 言語学研究会編 (1983) 『日本語文法・連語論 (資料編)』 むぎ書房
8. 高橋弥守彦 (2002) 「移動を表す動補連語“走进来”について」『外国語学研究』第3号 大
東文化大学大学院外国語学研究科 「高1」
9. 高橋弥守彦 (2003a) 「移動を表す動補連語“走回来”について」『語学教育研究論叢』第20
号 大東文化大学語学教育研究所 「高2」
10. 高橋弥守彦 (2003b) 「位置移動動詞“进, 出”と空間語との関係について」『外国語学研究』
第4号 大東文化大学大学院外国語研究科 「高3」
11. 高橋弥守彦 (2003c) 「格付き空間名詞と<ひと>の動きを表す動詞との関係」 「高4」
12. 高橋弥守彦 (2004) 「動詞+“过”+空間名詞の中の“过”について」『日中言語対照研究論
集』第6号, 日中対照言語学会 「高5」
13. 方美麗 (2002a) 「<行く先の結びつき> ~日中対照分析~」『外国語教育論集』第24号 筑波
大学 「方1」
14. 方美麗 (2002b) 「連語論〈移動動詞と空間詞との関係〉—中国語の視点から」『日本語科学
11』国立国語研究所 「方2」
15. 朴鐘漢 (2000) 「認知文法による現代中国語多義語の研究」『中央大学論集』第21号 中央大
学 「朴」
16. 朴貞姫・崔健 (2004) 「空間経路表現の日中対訳」『日中言語対照研究論集』第6号 日中対
照言語学会 白帝社 「貞」
17. 吉田賢抗編 (1984) 『新釈漢和辞典』新訂版 明治書院 『吉』
18. 李臨定著／宮田一郎訳 (1993) 『中国語文法概論』, 光生館 『李』
19. 呂叔湘主編／牛島徳次監訳・菱沼透訳 (1992) 『中国語用例辞典』, 東方書店 『八』
20. 刘月华主編 (1998) 《趋向补语通释》, 北京语言文化大学出版社 《刘》